

# 三重県出土の和同開珎

新名 強

## 1 はじめに

三重県下出土の皇朝銭については、かつては鈴木敏雄氏が丹念に資料を収集され、多くの記録を残している。ただ、こうしたものの中には、すでに銭貨が散逸してしまったものや、所在地等が不明になったものも多く見られた。これらに対し、岡田登氏は鈴木氏の資料を整理・検討し、三重県下出土の皇朝銭について集成している。さらに出土した遺構や遺跡を分析し、三重県下の皇朝銭の傾向について分析している（文献1）。その後、新たな出土事例や、報告書の刊行などにより出土状況が判明したものなどの事例を加え、三重県出土の和同開珎について再度検討してみたい。

## 2 各地域の概要について

三重県下では、32 地点から 70 枚を超える和同開珎が出土している。そのうち、伊勢国は 22 地点、志摩国は 6 地点、伊賀国は 3 地点、紀伊国となる東紀州地域では 1 地点で確認されている。ここでは、旧国単位で遺跡の概要を述べたい。

### (1)伊勢国

大国である伊勢国はその範囲が大きいこともあり、出土地点・出土数ともに三重県下では最も多い。22 地点から 53 枚の和同開珎が確認されており、そのうち 6 枚は銀銭が含まれる。伊勢国内では、宇賀新田古墳群や高松遺跡など、古墳から出土するものもある。これらについては、追葬の可能性が指摘されており（文献1）、副葬品としての用途が考えられる。また、和同銀銭が出土した大欠積石遺跡は、古墳の残骸の可能性もあるが、遺跡の性格は不明である。ただ、近くに無文銀銭が出土した北野古墳があることや、奈良時代の伊勢国府と河曲郡衙の中間点に位置することから、国庁や郡衙等との関わりが考えられる。

中勢地域北部では、皇朝銭の出土地点がまとまって見られる。大里西沖遺跡や六大B遺跡は大きく見て同一地域の集落と考えられ、前者では和同開珎が一括で、後者では和同銀銭が出土している。特に六大B遺跡では、飛鳥時代～平安時代の掘立柱建物が 80 棟程確認され、コの字状に配置する建物も見られる。隣接する六大A遺跡でも、獣脚円面硯や墨書土器、緑釉陶器などが多数出土しており、一般集落とはかけ離れた様相を示している。この辺りは、平城宮木簡にも登場する「窪田郷」に比定され、奄芸郡の中心地であったと考えられる。一方、伊勢湾沿岸部の貴證塚遺跡と千里ヶ丘遺跡でも和同開珎が出土している。貴證塚遺跡では、壺内より緡銭の状態で銭貨が 7～80 枚出土した記録がある。ただ、銭貨については 2 枚が和同開珎であった事がわかるのみで、他のものについては不明である。千里ヶ丘遺跡は伊勢湾を望む丘陵上に位置し、和同開珎

は集落の北側より確認されている。千里ヶ丘遺跡の裾部に当たる白子や別保には中世の段階まで潟湖があったとの指摘もある(文献2)。背後には6世紀前半～8世紀前半にかけて操業していた徳居窯址群が存在している。

松阪市の花岡古墓群では、175枚もの皇朝銭が出土している。いずれも、耕作や土取りの際など3度にわたって発見されたもので、当初は数百～千数百枚に上る銭貨が出土したが、いずれも和同開珎・萬年通寶・神功開寶の3種であった。墓誌とも考えられる鉄板が5枚出土している。墓は遺物や出土状況から3基あったと考えられている。

齋宮跡では2基の土坑から和同開珎が9点出土している。土坑はいずれも祭祀遺構と考えられ、須恵器や土師器の杯に納められていた。和同開珎を全て裏向きに置いたり、ともに須恵器や土師器で蓋がされるなど、同じような埋納方法が採られていたことから、祭祀に規範があった可能性が考えられる。

この他、脇ノ田遺跡では中世の埋納銭とともに和同開珎が出土した例も見られる。

## (2) 志摩国

志摩国内では、6地点から14枚の和同開珎が確認されている。銀銭は、奈佐遺跡・畔名・志摩圏内で確認されているが、いずれも採集されたもので、遺構等は明かでない。注目されるのは城山古墓で多量の皇朝銭が出土していることである。蔵骨器とともに木箱に納められていたと考えられ、和同開珎のほか萬年通寶や富壽神寶などが150枚以上出土したとされている。こうした出土例は、ほぼ同時期と考えられる和部古墓や珍敷古墓でも確認されている。前者では木箱に納められた隆平永寶等が200枚以上出土したとされ、後者では土師器甕から隆平永寶や富壽神寶が1,000枚程度出土したとされている。これらの墓は志摩国分寺や志摩国府近郊に埋葬されており、国分寺や国衙に深く関わった、かなり身分の高い人間と考えられる。城山古墓の被葬者についても、国衙に深く関与した人間が想定される。

一方、贅遺跡では8枚の和同開珎をはじめ、神功開寶や富壽神寶など11枚の皇朝銭が出土している。いずれも遺構ではなく堆積層から確認されている。この遺跡は、海浜部の遺跡でありながら帯金具が多数出土するなど、一般集落とは考えられない様相を示している。製塩土器も多数出土していることから、塩や海産物の貢納を行っていた公的色彩の強い集落であったと考えられる。この他、海浜部の奈佐遺跡や飯浜貝塚など海浜部で皇朝銭が多く出土していることは、南伊勢・志摩地域の特徴と言えよう。

## (3) 伊賀国

伊賀国内では3地点から3枚の和同開珎が出土している。このうち、銀銭は比叢河内で出土した1枚のみである。伊賀国内では阿拝郡より皇朝銭が多数出土しているが、これは当郡が伊勢国府や国分寺が所在する伊賀国の中心地だからであろう。特に、北門遺跡は伊賀国府と三田廃寺の中間点にあり、円面硯や緑釉陶器など官衙的色彩が強い。和同銀銭が採集された比叢河内は、伊賀国北部の山間部に位置するが、この地は上野から信楽を結ぶルート上に位置し、東大寺領の玉滝杣や丸柱保にも近く、古くから開発されていたと考えられる。

## (4) 東紀州

東紀州地域の出土は、熊野市有田町地内から和同開珎が出土した1例のみである。この地には、かつて広大な潟湖があったと考えられる(文献3)。潟湖奥に位置する津ノ森遺跡からは、古墳時代初頭頃の東海系の土器が出土しており、港として各地と交流していたと考えられる。古代においても、港が機能していた可能性があろう。

### 3 出土傾向について

次に、出土状況や遺跡の性格が明らかなものについて、それぞれの傾向について考えたい。

#### (1)古墳

宇賀新田古墳群と高松遺跡が挙げられる。和同開珎は、追葬に伴って納められた可能性が指摘されているが、祭祀のみが行われた可能性も捨てきれない。

#### (2)墓跡

花岡古墓群と城山古墓が挙げられる。花岡古墓群は、出土状況などから3基以上の墓跡があったと考えられ、この丘陵では、身分の高い人々の墓域として利用されていたと考えられる。被葬者については飯高氏の可能性も指摘されている(文献4)。城山古墓では、木箱に納められていた事が注目される。千里ヶ丘遺跡のものは開墾中の出土であり、遺構こそ明らかではないが、土師器甕に和同開珎が納められ、須恵器盤で蓋がされていた。同じような土師器甕を蔵骨器として使用した例が斎宮跡でも見られる。また、貴證塚遺跡のものは蔵骨器状の壺から出土し、炭もあったとされるので、これらは墓であった可能性が高い。

#### (3)土坑

土坑から出土したものうち、斎宮跡のものは祭祀遺構と考えられる。118次SX7860からは、土師器杯に5枚の和同開珎が納められ、篋描きのある高杯で蓋がされていた。和同開珎は、全て裏向きに置かれ、袋に入れられていたか、布が敷かれていたと考えられる。130次SX8310では、須恵器杯に和同開珎が4枚納められ、杯蓋が被せられていた。和同開珎は全て裏向きに置かれ、銭貨の配置や方向に規則性が見られる。118次と130次はともに、意図的な埋納がなされており、何らかの祭祀が行われたものと考えられる。

このほか、大里西沖遺跡では7枚の銭貨が一括出土している。銭貨は3枚が和同開珎と判読でき、残りについても和同開珎である可能性が高い。銭貨以外目立った遺物が遺構より出土しておらず、どのような目的で埋納されたのかは不明である。

#### (4)包含層

包含層等から出土したものは、六大B遺跡・贅遺跡・北門遺跡である。いずれも一般集落とは異なる官衙的な色彩の強い集落である。

#### (5)その他

川方神社遺跡や脇ノ田からは、和同開珎とともに多量の銭貨が出土している。前者は萬年通寶や神功開寶、隆平永寶など多種にわたる皇朝銭が確認され、川方町一帯が丘陵地であることから、花岡古墓や珍敷古墓のように、墓であった可能性も考えられる。一方後者は、萬年通寶や半兩銭、五銖銭とともに多量の北宋銭も出土しており、中世の埋納遺構であろう。大欠積石遺跡は、遺跡

の性格が不明であるが、古墳や墓、祭祀遺構のようなものがあつたのであろう。

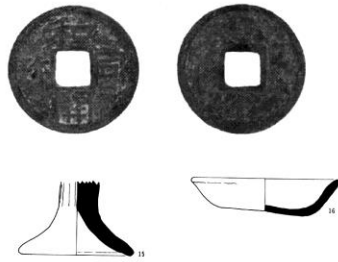
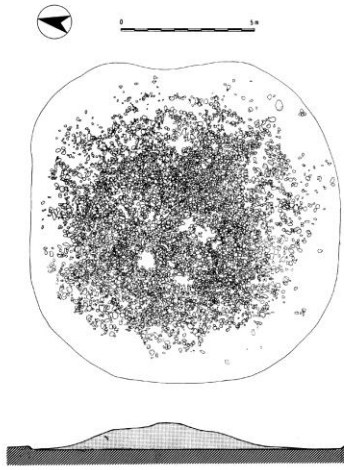
#### 4 おわりに

三重県下の和同開珎の出土傾向を考えると、遺構から出土したものでは、墓跡からの出土例が多い。古墳から出土したものを、追葬とするならば、遺構から出土したものの半数は墓から出土したものとなる。さらに、齋宮跡の例を加えるなら、埋葬や祭祀といった儀礼的な行為に用いるケースがほとんどと言える。どのような祭祀に用いられていたかは明らかではないが、齋宮跡の例は、銭貨の置き方にも注意が払われている。共に蓋がなされるなど、埋納方法に規則性があつたことが窺える。一方、土坑や包含層から出土した例では、官衙的な様相を示す遺跡が多い。こうした傾向は、他の皇朝銭が出土した遺跡においても、概ね同じような傾向を示している。三重県下では多量の皇朝銭が出土しており、相当数の銭貨がもたらされていたと考えられるが、出土する場所は、墓や官衙、官衙的色彩の強い集落など特定の場所である傾向が強い。これは、皇朝銭の流通範囲が十分に広がっていなかったためであらう。

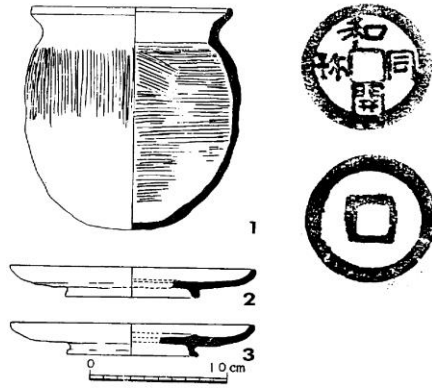
また、南勢・志摩地域では海浜部での出土が多く、海産物の生産との関係が指摘されている(文献1)。これに加え、港との関係も今後検討が必要であらう。千里ヶ丘遺跡や貴證塚遺跡に近くには潟湖の存在が考えられ、荘遺跡も砂堆上に位置している。南勢・志摩地域や東紀州地域には、多くの古代港があつたと考えられ、こうした港を中心に皇朝銭が流通していたのであらう。

#### 〔引用・参考文献〕

- (1) 岡田登 1993 「三重県下出土の皇朝銭について」『史料』第126号、皇學館大學史料編纂所
- (2) 岡田登 1995 「皇朝銭出土の松阪市花岡古墓群について」『史料』第139号、皇學館大學史料編纂所
- (3) 伊藤裕偉 1999 「伊勢湾西岸部における中世港町の状況」『ふびと』50号、三重大学歴史研究会
- (4) 穂積裕昌 2000 「紀伊半島東岸部の古代港と海上交通—記紀熊野関連説話成立の前提—」『Mie history』  
三重歴史文化研究会
- (5) 浅生卓司 2003 「徳居窯址群の須恵器生産」『Mie history』vol.14、三重歴史文化研究会
- (6) 故鈴木敏雄・岡田登 1994 「皇朝銭出土の志摩郡阿児町の二古墓について」『史料』第134号、  
皇學館大學史料編纂所



大欠積石遺跡



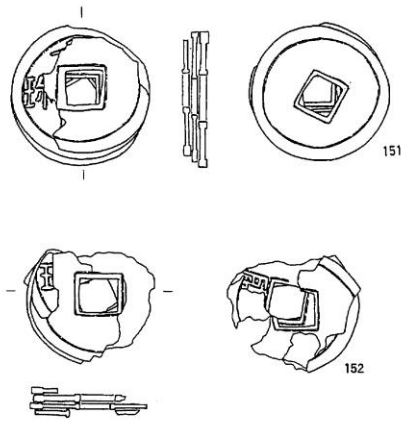
千里ヶ丘遺跡

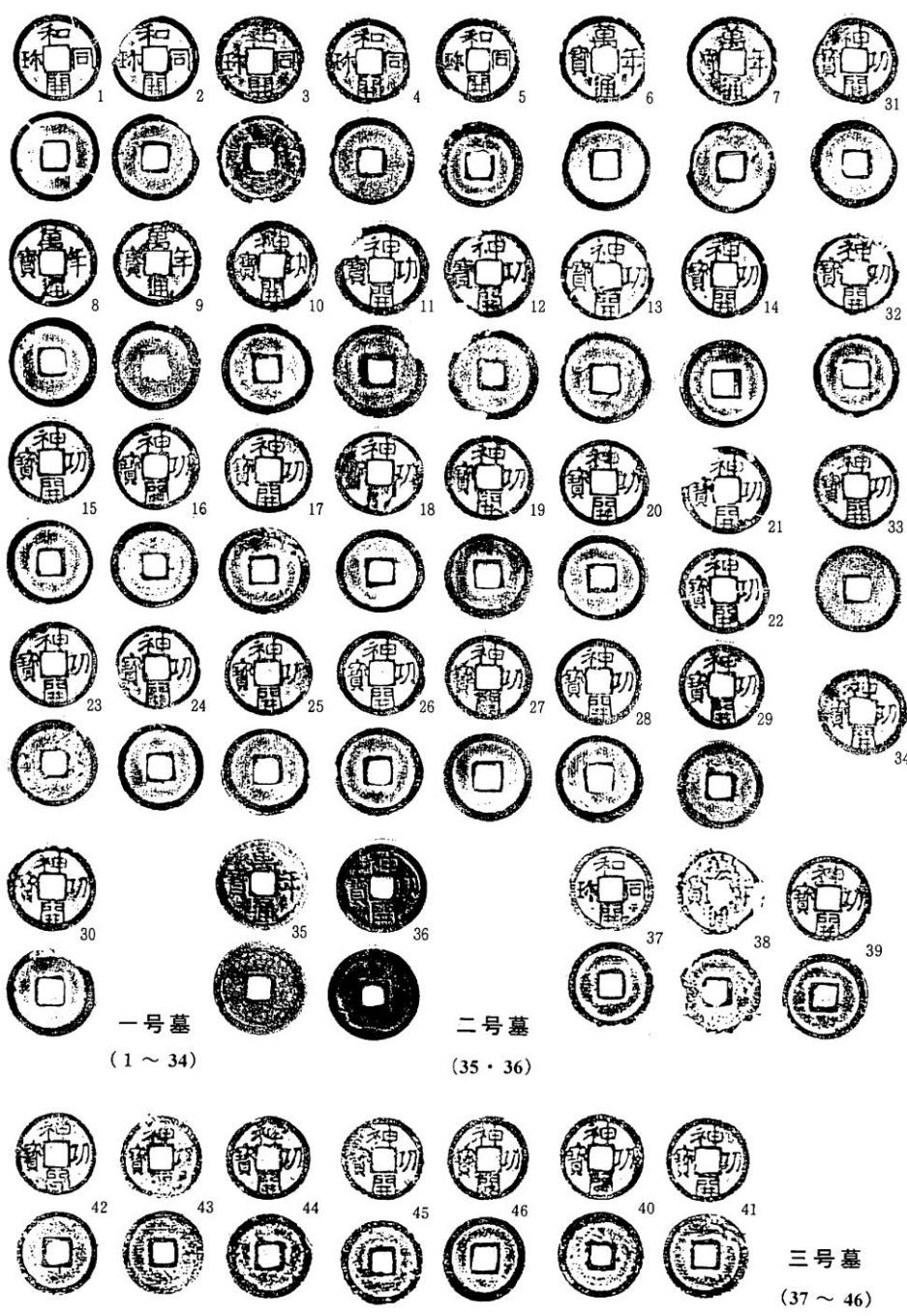


六大B遺跡



大里西沖遺跡 SK182



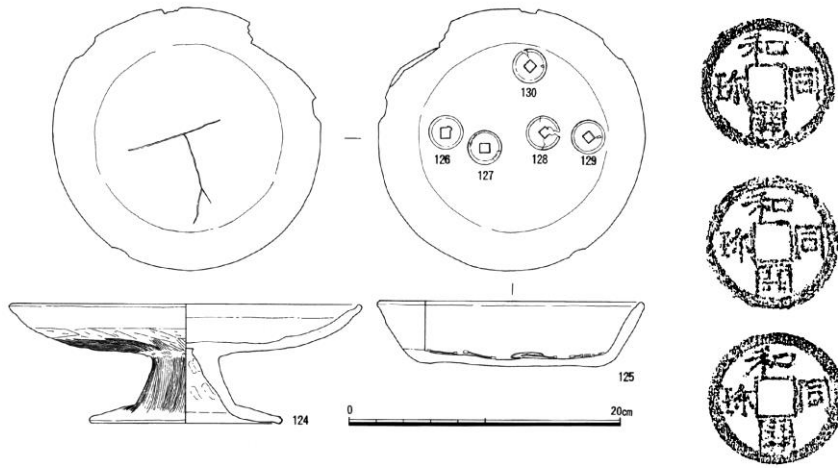


一号墓  
(1 ~ 34)

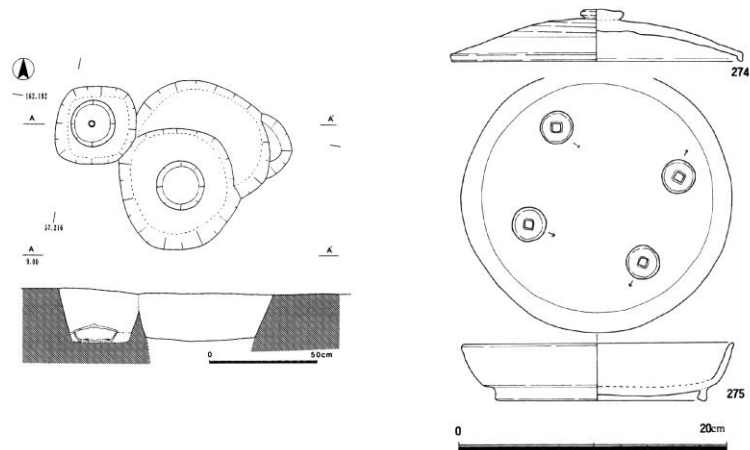
二号墓  
(35 ~ 36)

三号墓  
(37 ~ 46)

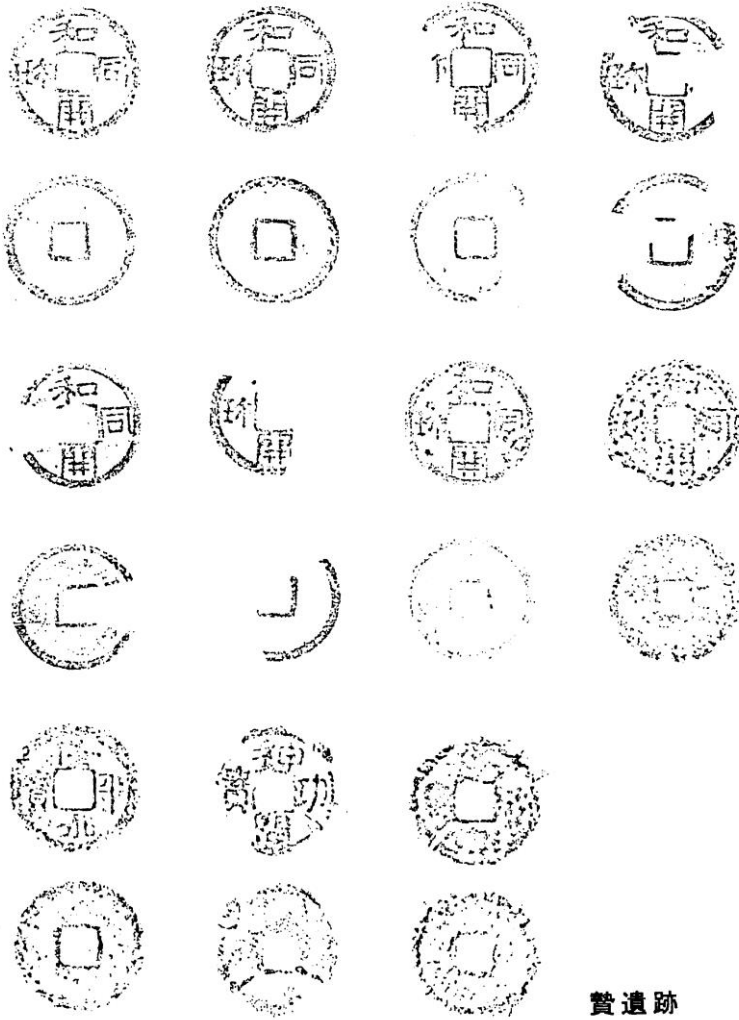
花岡古墓群



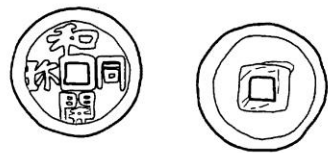
齋宮跡118次 SX7860



齋宮跡130次 SX8310

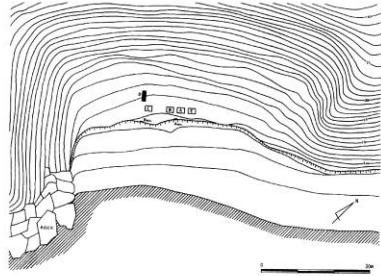


贊遺跡



奈佐遺跡





迫間浦道瀬遺跡



北門遺跡

【転載・出典文献】

- ・「大欠積石遺跡」『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会、1978
- ・『千里ヶ丘発掘調査報告』千里ヶ丘遺跡調査会、1968
- ・『六大B遺跡(B～I地区)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2006
- ・『大里西沖(2次)遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1994
- ・岡田登「皇朝銭出土の松阪市花岡古墓群について」『史料』第139号、皇學館大学史料編纂所、1995
- ・『史跡斎宮跡 平成9年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館、1999
- ・『史跡斎宮跡 平成12年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館、2002
- ・『史跡斎宮跡 平成14年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館、2004
- ・『鷺遺跡』鳥羽市教育委員会、1975
- ・平松良夫「答志島桃取町出土の和銅銀銭」『紀伊半島の文化史的研究』考古編・本文、関西大学文学部考古学研究室、1992
- ・『迫間浦道瀬遺跡』南山大学人類学研究所考古学研究室編・南勢町教育委員会、1976
- ・『北門遺跡(1次)発掘調査報告』上野市教育委員会、2004